

Ⅲ ヒロシマ体験と倫社での取り組み

田 中 裕 巳

一、なぜヒロシマにこだわるか

「先生は長崎で被爆したというのに、なぜそう広島、広島……というんですか？」と時々、生徒に言われる。私は今まで、この問いを無視してきたが、実のところ、倫社のオリエンテーションとして、体験→経験→思想という個別的、具体的なプロセスを重視せよと言い続けて来た以上、この生徒の問いは、長崎原爆の被爆者としての私にとっても“無視”してすむはずのものではなかった。

“無視”してきたのには、いくつかの理由があるが、最大の理由は、私の被爆体験が真に“体験”と呼べるものであるのか、という“負い目”である。私はかつて次のように書いたことがある。

「8月9日の存在証明は、何一つ記憶をもたないものにとっては、いくら公認されても、いくら伝聞証拠を集めても、存在感がまきにならない。自分の8月9日のイメージを豊かにしたいとは思いますが、私の8月9日の存在証明は、あくまでも原爆にこだわり続けて行くこと、あくまでも“原爆体験”という原点から、教育や政治にコミットして行くことの、その“持続する志”の中にしかないのではないかと、思うようにしている」('79. 11. 8 研究旅行の資料集所収“原爆と私”より)

爆心地から3.9キロメートルに居住していたことを、2人の知人に証明してもらって被爆者健康手帳の交付を受けているにもかかわらず、当時3才と1カ月余りの私には、被爆時はおろか、被爆後の、およそ長崎原爆に関するいっさいのことが記憶されていない。従って私にとって「記憶にないことにこだわり続ける」というほかないのである。

4才になる前に長崎を離れてから、一度だけ、大学4年の時に、自らの“原点”を確認すべく長崎を訪れた。初めて見た原爆資料室の、大きなガラスのビンの中に入ったタマネギの畸型に最も大きなショックを受けて帰ってきた。この時の印象の強さが、後に見た広島原爆資料館の展示物よりも長崎のそれの方が強烈である、という先入観を作ってしまった。

しかしながら、私にとって、“記憶のない体験”である以上、広島か、長崎か、それ程こだわる必要はないのである。“記憶のない体験”を生徒に語る時、それは、親から集めた伝聞証拠を私のイメージで増幅しているにすぎない。そのイメージの増幅のためには、

とくに長崎にこだわる必然性がない、というのが“記憶のない被爆者”の“負い目”であり、“強味”でもある。

長崎でなく、広島にばかりこだわっているという生徒の問いを無視してきたもう一つの理由は、言う必要もないようなことだが、研究旅行で訪れるのは今のところ広島であって、長崎ではない、ということである。実際に訪れる広島を原点として、そこから日本人にとって被爆体験とは何であったのか、を考えたいと思うのである。ただ、訪れるのが広島ではあっても、長崎における被爆者の闘い、永井隆、秋月辰一郎、井上光晴らの作品群の紹介や正当な位置づけなしには、“被爆体験のもつ現代思想への視座”をトータルにつかむことは不可能であろうし、その試みにおいて、長崎における被爆者の一人としての努力が不足していることは率直に認めざるを得ない。

冒頭から極めて個人的な叙述をしてしまったが、“体験”というものを考える手続きとしてお許し願いたい。

私にとって被爆体験は既に述べたように、“記憶のない体験”であり、伝聞証拠にもとづいて絶えず増幅して行くほかないような“体験”である。しかし、そこを離れては、《わたくし》が存在しないことを、タマネギの畸型からのショックとして受けとめた。

森有正は、“体験”とは経験の過去化であり、過去の一つの特定の時点に凝固したものであり、“経験”とは、内容が絶えず新しいものによってこわされて、新しいものとして成立し直して行く、未来にむかって開かれたものであり、体験を経験に転化させるよう努力しなくてはいけない、という(『生きることと考えること』講談社現代新書、P. 96～100)。まさに私の“被爆体験”とは、そもそもから過去に凝固しえようはずがなく、経験への転化を絶えず要求し続けているものと言えるのかも知れない。

森有正はこうも言っている。

「感覚から経験に到る前に、知覚と想像と情念との広大な領域を経過しなければならないことが、自己の感覚的体験の内面から明らかになってきたことは本当にうれしい。」(“流れのほとりにて”『森有正全集』1. 筑摩書房、P. 413)

体験→経験へのプロセスにとって、“知覚と想像と情念”とがいかに絡み合わざるを得ないものか、そして、そのプロセスは決して体験をつき放して客観視してみればすむという代物ではないことを教えている。

“知覚と想像と情念”という自己の網目をくぐらす以外に、体験→経験へのプロセスはなく、そのプロセスを通らずに《わたくし》は存在しない。森有正にとって、ヨーロッパを中心とする近代の思想を真に把み切るには(それは同時に、近代ヨーロッパとは異質の風土の中で育った自己を了解する作業であったはずだが)、17年間の滞欧生活を必要としたように、長い長い道のりであろうし、生きることにそれ自体であるという他はないものなのかも知れない。

旅とは、未知のもの、人との出会いである。その出会いから何をくみとるか、どうこだわり続けるか、そこに《わたくし》がある。写真を見ることも、様々な遺品を見ることも、未知の人から“体験”を聞くことも、一つの体験ではある。しかし、それがすべて原爆にかかわることであっても、被爆体験を体験することははや不可能であるし、不可能であり続けねばならない。

追体験という言葉がある。当事者の話を聞いたり、ドキュメントを見たり、読んだりすることで、当事者の状況を想像することは出来る。しかしそれは所詮、追《体験》であって、当事者の体験とは異質なものでしかありえない。しかし、同じ状況を構成していた人人の体験が、同一ではありえない以上、“遅れて来たもの”がそう“負い目”を感じる必要はないのではないだろうか。追体験であろうが、間接体験であろうが、擬似体験であろうが、己れの“知覚と想像と情念”をもって、いかに経験に転化して行くか、それこそが大事なことだと思う。これが、自ら“記憶のない体験”にこだわり続けるものとして、「なぜヒロシマにこだわるか」の内面的理由である。こだわっているヒロシマのなかみ、ヒロシマへのこだわり方は次章で述べてみたい。

二、ヒロシマをどう伝えるか

被爆者の原水爆禁止運動へのかかわり方は様々である。病床にあって動けぬ者、たえず白血病の恐怖に戦慄している者、いい知れぬ不安のうちに生きる被爆2世そして3世、天皇を呪詛し続ける朝鮮人被爆者……。被爆という“体験”なしに彼らは存在しないし、その体験をどう内面化してきたかは、おそらく、原水爆禁止運動へのかかわり方、思いというものを抜きにしては語れないだろうし、そのかかわり方、思いの中で、彼らの体験はより内面化されてきたという関係にある、と思う。他人ごとではなく、“記憶のない体験”をもつ私にも、私なりの原水爆禁止運動へのかかわり、平和へのかかわり方があったし、今も私なりのかかわり方をしている。そして私が教師である以上、被爆教師の一人として、その最も主要なかかわり方は、授業場面にあ

るし、被爆体験をどう伝承するか、にあると思っている。また倫社という教科の担当者としては、被爆体験をどう思想化するか、被爆の思想というものがあろうのか、それは現代の思想とどうかかわりうるのか、を明らかにする必要があると思っている。

以下、倫社を担当する度にはほぼ1カ月(7~8時間)を費やして行なってきたヒロシマ学習の中で、精選されてきた教材を紹介し、教材設定の視点を簡単に述べてみよう。

1. 『ヒロシマ1945-1979』(土田ヒロミ、朝日ソノラマ、1979年7月)

この本は今年度初めて使用したものである。“『原爆の子』の30余年”という副題がついているように、『原爆の子』に収録された186名の作文の著者たちの1978年の姿を収めた写真集である。107名の住所が判明し、うち故人6名、拒否16名(内1名は取材後死亡)、撮影拒否(インタビューのみ)8名、残り77名が取材に応じたという。写真の下には氏名、年齢、被爆時の様子、現在の職業・家族と、『原爆の子』の中の作文の一節が付されているに過ぎない。30余年の生き様や現在の原水爆禁止運動とのかかわり等、インタビューはなされていても、それは一切明らかにされていない。それだけに写真とその説明から、見る者に想像力をかきたてる。とくに背中だけであったり、おそらくその著者の日常にかかわる風景だけの写真であったり、氏名、年齢等一切なく、ただ〈拒否〉とのみ印刷されているページは、生徒たちに“被爆体験”の持つ意味をいやがおうにも考えることを余儀なくさせると思った。

プリントして教材化した部分はこの本の製作者である土田ヒロミの仕事を紹介した後書き(吹上流一郎“『原爆の子』たちは大人になっていた”、プリント4枚)と、次の『原爆の子』の作文のうち、若狭育子、竹村紀子(撮影拒否、後姿)、藤田恭生、近藤俊彦(1970年没)、原木康、石橋泰弘、坂口博美、原美恵子、世羅恵、原徹の作品に付した写真10葉である。

2. 『原爆の子』(長田新編、岩波書店、1951年)

生徒のうちで、今までに同書を読んだことのある者は、例年2~3名。ほとんどの生徒にとって、このような記念碑的な本のあることすら初めて知ることであった。今年度は前述のほか高井君子、浅枝正忠、古前和子、武内健二、大川明作の作品をプリントし、全部で16枚となった。結局、同書のうち15篇を選んだことになるが、うち7篇が執筆時、高校生のものであった。後述するように、とくに“核実験に抗議する”というプラカードを持って平和公園に一人立つ姿を付した坂口博美の作文、「元安川の

川べりの平和ドームを訪れる旅人よ。あれは見世物ではないのですよ』という原徹の文章は、1カ月後に平和公園を訪れることになる生徒たちの胸の奥深くつき刺さるものがあったようだ。

3. 『ヒロシマ・ノート』（大江健三郎、岩波新書、1965年）

昨年までは、“エピローグ広島から”だけをプリント（5枚）して渡していたが、今年は、研究旅行が春から秋に変わった関係で、夏休みの宿題として全文読ませた。四の“生徒たちの感想から”にもあるように、被爆当時の状況、被爆者の生き様をこの本から知り、高校生の必読書にすべきだとまで感銘する生徒もいた。ただ、《広島で人間を考える》、《真に広島を思想を体現する人々》という大江健三郎のテーマに直接論及した授業は今年度は展開しきれなかった。

4. 『状況へ』（大江健三郎、岩波書店、1974年）

大江健三郎自身のヒロシマへのかかわり、ヒロシマからの視座を学ぶために、同書もとりあげた。生徒には第1章の“ガリウァの馬”をプリント（5枚）して配布。片手に核爆弾、片手に通常兵器、しかもみな殺しの性能において限りなく核爆弾に近づけて行くという、今日の核体制そのものをヴェトナム戦争を例として語り、原民喜が目撃したという“ひとく愁然と哲人のごとく首をうなだれていた”馬に、ガリウァのフウイヌムの馬をかさねあわせることによって、ヤフー日本人と断定する大江健三郎の想像力の豊かさを学びとりたかった。これも四の“生徒たちの感想から”にみるように、原爆資料館内の“被爆した馬”を他の展示物からひととき印象つけることになったと思う。

5. 『ヒロシマ、ひとりからの出発』（高橋昭博、筑摩書房、1978年）

被爆時14才の少年が、被爆というハンデを負いなから、そのハンデを“強靱な生き方”の核にまでこねあげてきた、というのが私の読後感で、“私はく被爆の実相を伝えるメディア”として、残りの半生を終わることに喜びすら感してくる”という著者の最後の言葉に甘えて、研究旅行で広島訪問の際、講演をしていただけないか、とふしつけないお便りを出したのが9月。快くお引受け下さるとのお返事を早速いただいたが、この4月から、広島市役所広報課主幹から転じて平和記念資料館（いわゆる原爆資料館）館長となられていたことを知らされた。偶然とは言え、館長御自身から被爆体験をお聞きすることが出来た上に、色々な御便宜を計っていただいた。

本書は講演をお願いしている関係で、紹介する程

度にとどめたが、“被爆の日（P.3～9）”、昭和30年6月、広島を来訪した9カ国9人の科学者に、逡巡の後、体のケロイドを見せた時の思い（P.35～37）、“私の性格・被団協の仲間”（P.58～62）などを読んで聞かせた。

6. 『日本原爆詩集』（大原三八雄・木下順二・堀田善衛編、太平出版社、1970年）

今年度は、原爆体験についての学習を“総合学習グループ”で集団的に取り組むことになり、英語の山田が、同じ太平出版社の“The Songs of Hiroshima”からの日本語訳を学習させている（次章参照）ので、原爆詩から、被爆時の状況や被爆者の思いを想像させる、という作業は私自身は行なわなかった。このような協力の得られなかった昨年度までは、原民喜“水ヲ下サイ”、草間透“青い閃光”、向井孝“記録”、峠三吉“八月六日”、大島久徴“死者への問いかけ”、原田治“お父さん（一）”、是永千秋“原爆”、松島愛子“げんばく”、奥本清志“原爆の日”、神田周三“自画像”など13篇をプリントして配布していた。たとえば、生徒に書かせている“授業ノート”にはこのような感想が書かれていた（昨年度『H2B倫社』より）。

「今日の授業は原爆についてです。詩を読みました。全ての詩に感じるのは、ひどいと言うこととなにかこう心にグサッときます。一時間をこう言った時間にするのは決してムダな事ではありません。本当です。数学や英語よりはずっと貴重だと思います。“死者への問いかけ”を読んで私は本当に力のない事を知り、20万人の人達へのうすっぺらな同情は必要ないんだと思いました。今さらと思っている人か何人いるかもしれない。醜い体で生きているより死んだ方がましだと思っている人がいるにちかいない。だけど、いったい私に何ができる？私と同じ年頃の女の子か太鼓腹、片眼つぶれ、半身あかむけ、丸坊主。どうして？どうして気持ちが悪いなんて言えるの？研修旅行へ行ったらしっかり見てこようと思います。“戦争は人間を物にする”、“人か人でなくなる”、先生の言われた言葉です。本当に戦争なんてもうイヤです」（竹口優加、1978年5月10日）

これは後でふれねばならないことの一つだか、私は生徒たちに、広島へ行く限りは、ヒロシマのスライド、『広島・長崎原子爆弾の記録』（子どもたちに世界に被爆の記録を贈る会）、『劫火を見た 市民の手で原爆の絵を』（日本放送出版協会）などの視覚的な教材はいっさい提示しなかった。もっぱら言語による想像力のひろがり期待し、また、資料館の展示物を初めて見る時の感動が減殺されることを恐れた。そういう意味で、上の感想を書いた生徒

の場合、“同じ年頃の女の子”という視点から、“うすっぺらな同情は必要ないんだ”“しっかり見てこよう”という正対する姿勢を打ち出し、原爆詩の力は極めて大きいと思う。

7. 『広島・長崎30年の証言』上・下巻(広島・長崎の証言の会編 未来社 1975年、1976年)

この上下2冊の、被爆30年の総括とも言える力作の数々のうち、例年、次の3篇をプリントして配布している。

- ①辛泳洙 “被爆と民族の問題——日本政府・天皇・国民への苦言”
- ②島津邦弘 “核に追われる難民——ミクロネシアの被爆者たち”(以上は上巻第五章)
- ③栃木利夫 “日本近・現代とヒロシマ・ナガサキ”(下巻第八章)

①と②とはもちろん、被爆は日本民族のみの問題ではないこと、在日・在韓の朝鮮人被爆者の問題、核戦略体制の下での核実験によるミクロネシア被爆者の問題へと、視座を発展させて行くための教材であり、私の原爆学習ではいつも最後にとりあげている。今年度の場合は、『白いチョゴリの被爆者』(労働旬報社、1979年)のち許南麒の“スニのための鎮魂歌”を読み上げ、同書も紹介した。

③は、広島・長崎になぜ原爆が投下されたのかを近現代史の中に位置づけ、広島・長崎の軍事的意味を浮きぼりにしている恰好の教材である。今年度の場合、『1945年8月6日』(伊東社、岩波ジュニア新書、1979年)から“4 原爆はなぜ広島・長崎へ”も一部紹介したが、これらをベースにしなが、広島・長崎の歴史的な位置づけをきちんとおさえる教材を作製しておく必要性を感じた。

8. 『若い広場 '79ヒロシマ体験』(NHK教育TV)

これは昨年9月に放映されたものを、VTRで見せた。授業時数の関係で、3クラスのうち1クラスにしか見せることができなかつたが、原爆学習の総括として全クラスに見せることができなかつたことが悔まれる。内容は、若者たちによる原爆体験の継承のための集会を企画・参加した青年数人の姿を、その集会を中心にしてまとめたものであった。このVTRを見た生徒は次のように感想を書いている。「“ヒロシマ”という問題は、授業を重ねるにつれてだんだん私の頭の中に疑問が湧いてくる。夏以来『ヒロシマノート』を読み、数十枚のプリントを授業で読み、これまで無に等しかつた“ヒロシマ”の知識であったが少しずつ、知識を得てきた。しかし、この知識が少しずつではあるが、ふえつづけているとは反比例に疑問が湧いてくる。かつて、社会科の教科書でお目にかかつた2、3行の“ヒロシマ”だ

けを知っていた時、私は、“ヒロシマ”の知識を2、3行の出来事として脳裏に納め、理解できたと思っていた。これが、“ヒロシマ”のあの出来事を要点を簡略にかつ正確に要約している文だと思っていた。——しかし、そうではなかつた、今は、あの浅薄で、短絡的な考え方のまま、大人にならずにすむことに私は感謝している。

テレビの中で“ヒロシマ”に打ち込んでいる青年達。私と同世代の人々ではあるが、私には持ち合わせてはいない物を数多く持っていた。私とほとんど年もちがわなような人たち、だのにあの人たちはすばらしい。

テレビの中の青年たちも知識だけを知っていてもどうにもならないようなことを言っていた。私も同感である。今私がいくらプリントを授業で読んでも、私の頭には知識の集積にしかならない。肌で「体験」してはじめて、胸で真に感ずるものがあつたと言っていた。幸い私たちは、研修旅行で広島へ行く、その時、肌で触れる機会があるのだ。知識ではなく、心に感ずることのできるかも知れない。機会があるのだ。私は広島へ行く際には、白紙の状態で行きたい。心に感ずるものを受け入れやすくするために。ただ、素直な感受性だけを持って……。

テレビの彼らたちのように、「運動」をしなくとも、私が台所でじゃがいもの皮をむく、一主婦になつても私は、知識ではなく、心で感じた“ヒロシマ”を知っていなければならぬと思う。いや知るべく義務があると思う。

倫理・社会という教科は、思想というパンを、理論というカラメルでからめた大きなかたまりだと思つていた。これを水なしに呑み込まなければならぬように思つていた。しかし、心で接するということが倫理・社会という教科のあの大きなパンの間に含まれていたら。この教科はとても大切な教科であると思う。「頭」だけでなく、「心」で消化する部分があるとしたら。私はその部分を食へなくては行けない。無視していくわけにはいかぬと思う。」(大崎容子、『H2C倫社授業ノート』10月17日)

長い感想を全文引用してしまったが、私の今年度の原爆学習の全体の流れを表現しているし、『'79ヒロシマ体験』の中から2つの基本的なことをつかんでいると思うからだ。一つは、知識と体験とのかかわりであり、いま一つは、“知る”ということの意味についてである。言葉や事項として知つていても、それが自分との生きたかかわりを持たないことをこの生徒は拒否しているのであり、広島を訪れることに大きな期待を持っている。そして“知る”ということが具体的な行動によって表わされねばなら

ないことを、「私には持ち合わせていない物」をテレビの中の青年たちが数多く持っている、という形で述べている。「台所でじゃがいもの皮をむく一主婦になっても」、「心で感じた“ヒロシマ”を知っていなければならない」という感想は、ヒロシマ体験が一人一人の生活に密着し、日常の意識の基底部に据えられて行かなければ意味がないという考えを表わしているように思う。

三、ヒロシマにて

昨年度までは、ヒロシマ学習といっても、事前学習に力点があり現地広島では、平和記念資料館を団体で見学するだけであった。ほぼ2時間の平和公園の訪問のうちのほぼ30分(早い者は20分、ゆっくりしている者で40分ぐらい)が、この見学にあてられたが、不思議に小・中学生の団体見学とぶつかってしまい、「見たかった原爆記念館も見ることができたし、もっとじっくり見たかったけどどっかの中学校といっしょで、うっとうしくてあまり見られなくて残念でした。(中略)もう少し大きくなったらもう一度行ってみたいと思います」(近藤千津子『戦争を知らない子どもたちにとってヒロシマとは……』第2集、P. 38)と一生徒が述べているように、かなり慌しいものであった。しかし昼食をとった後、公園内を散策するだけの者はむしろ少なく、別棟の平和記念館で、映画「ヒロシマ—原爆の記録」を見たり、丸木位里・俊夫妻を中心とする原爆絵画・彫刻、市民の描いた原爆展などを鑑賞してまわる熱心な生徒が多かった。

今年度は、すでに“はじめに”にも書いたように、平和公園での時間をほぼ30分延長した。その結果、高橋昭博資料館館長の講演と、全員での映画「ヒロシマ—原爆の記録」の鑑賞が可能となった。なんとか被爆者の方の被爆体験、被爆後の生き様を直接、話していただけないものか、というなが年の私の願望は、『ヒロシマ、ひとりからの出発』という本との偶然の出会いから実現した。しかもその方が、この年から平和記念資料館の館長に就任されていたという二重の偶然の上に。

高橋館長は、館長に御就任以来、“語り部”としての生活がますますお忙しく、大阪、和歌山などの学校への講演旅行から戻られたばかりとのこと。お疲れのところを鞭うってほぼ1時間、わが息子、娘たちに語りかけるような口調で話していただけた。被爆のときの様子、肉体から消えることのないケロイドのこと、黒い爪のこと、米ソの核実験のこと、生きるということ……お話は生徒一人一人の胸のうちに沁み込んで行った。(生徒たちがどのように受けとめたかは、後にふれたい)

平和記念館での映画「ヒロシマ—原爆の記録」は、いつもは日本語版と英語版が交互に上映されているが、英語版にあたるとナレーションがほとんど理解できないし、映写室の定員は40名ぐらいで、3クラスの生徒が同時に見ることはできない。高橋館長の御好意で、平和記念館2階のホールで全員で鑑賞することができた。宇野重吉のナレーションは心にズシリとくるものがあり、言語による想像力のひろがりや、などという私の事前指導のネライなど一瞬にして吹き飛ばしてしまう衝撃力があつたようだ。

短い時間の中であれもこれもと欲張りすぎたのか、資料館での見学時間が余りに切りつめられてしまったし、平和記念館の絵画・彫刻を見ることの出来た生徒は極めて少数の“間違っ入りこんだ”生徒に限られてしまったことが、反省材料として残る。

四、生徒たちの感想から……… ヒロシマ体験は何を残したか

研究旅行から戻って、1カ月後、私は次のようなアンケートを行なった。

- 「1. ヒロシマについての学習(授業)の中で強く印象に残っていることを3つまで指摘しなさい。(倫社以外の授業も含めて)
2. 広島で見たり聞いたりしたことの中で、“忘れられそうもないこと”があつたら3つまで指摘しなさい。
3. “被爆体験”の風化が嘆かれている。あなたはそのことをどう思うか? そしてもし、若者の立場から“風化”させてはいけないものだと考えるとしたら、あなたは一体、何をしようと思うか?
4. あなたにとって、今、ヒロシマとは、どのような意味を持って来ていますか?

私は今まで、研究旅行で広島を訪れるようになってからは、1975年度、78年度、79年度と倫社を担当し、75年度、78年度は高2のクラス担任でもあつた(今年度は、教科担任ということだけであつたが、研究旅行の実施にあたって、現地広島でのヒロシマ学習の責任者ということで広島のみ同行した)。前2年度、私は広島訪問のあと、“戦争を知らない子どもたちにとってヒロシマとは何か”というテーマで感想文を提出させ、同名の文集を作製し、生徒への記念として渡してきた。ヒロシマの学習は、私の倫社の授業にとって、まさにオリエンテーションの意味があつたし、倫社という教科が“現代にどう生きるか”を究極的には考えさせる教科だとしたら、日本人にとって、いや現代人にとってヒロシマの問題は避けて通ることは出来ない、という意味でも、その文集は一被爆教師からの、一倫

社教師からの Forget-me-not であった。

したがって、上の1~4のアンケートのうち、3と4は、『戦争を知らない子どもたちにとってヒロシマとは……』第3集として全文収録する計画である。ここでは、1と2を中心として、3と4については必要なものに限って論及したい。

1. ヒロシマ学習についての感想

上述のように倫社以外の授業も含めての、ヒロシマについての学習の中で“強く印象に残っていること”を3つまで書かせたところ、次のような結果が出た。(生徒数136名)

- 56名・『原爆の子』を読んだこと
- 47名・英語(リーダー)で原爆詩を訳したこと
- 19名・倫社のプリント、授業
- 17名・田中先生の被爆体験の話
 - ・被爆者の中に取材拒否をした人がいたこと(前述『ヒロシマ1945-1979』で出てきた)
 - ・原爆の破壊力のすごさ
- 11名・在日韓国人被爆者のこと
- 9名・平和記念資料館の写真の悲惨さ
- 8名・平和記念館での映画
- 7名・『ヒロシマノート』を読んだこと
- 6名・平和記念資料館そのもの
- 5名・『原爆の子』の写真集のこと(『ヒロシマ1945-79』)
 - ・VTR『'79 ヒロシマ体験』を見たこと
 - ・原爆の詩
 - ・原爆症の恐ろしさ
 - ・被爆者の苦しみ
 - ・たった一人でも続けている核実験反対運動のこと(『原爆の子』の坂口博美氏のこと)
 - ・高橋先生の講演
- 4名・広島町のようす
 - ・広島市民の努力
 - ・遺伝のこと
 - ・ケロイドのむごさ
 - ・原爆が簡単に作れること

以上が主なものである。記述式であるため項目の設定が難しく、結局は同じものを分けているものもあるようだが、全体の傾向は推測していただけるであろう。この問いのねらいは、総合学習グループのメンバーの行なった、それぞれの視点からのヒロシマについての事前学習が、どの程度生徒の印象に残っているのかを調べることにあったが、2の問いとの混同が目立ち、ねらいは十分に果たされていない。それでも、問いのねらいをとらえて率直にヒロシマ学習についての印象を語っている事例を紹介してみよう。

○「・原爆の子の生々しい小中学生の作文 小学5年生

のときよんでショックを受けたが新たにショックを受けた。

- ・リーダーで訳した詩 英語を日本語に訳すときに“言葉を選ぶ”のにたいへんな苦勞をした。
 - ・核兵器のおそろしさ(現在それを多数の国が所持していること) (秋本祐子)
 - 「・田中先生の配ってくれたプリントの中の被爆者で、夫に自分が被爆したことをかくしつづけている、という女の人のこと。
 - ・田中先生のおっしゃったことで、「広島なんの罪もない人々が殺された、といわれるがあれはおかしい」ということ。私も今まで、なんの罪もない広島の人々と思っていただけ、先生のおっしゃったことをきいて、はっとしました。
 - ・被爆者も、その子どもも、今は何ともないかもしれないが、いつか症状があらわれてくるかもしれない、ということ。」(岩田佳子)
 - 「・被爆した人々の体験記の中の一節「家の下じきになっている人がいたのでお父さんはその人の足を切って助けてあげた」というところが、なぜか頭に残る。
 - ・英ゴの詩を訳したとき(Rの授業で)、「私たちに歌う歌はあるか——ない、悲しい歌を除いては。」といったところ。
 - ・写真集で「拒否」とのみ書いてあり、家が写っていた写真。」(木村理津)
 - 「研究旅行での映画……原爆のひさんさ
 - ・VTR……広島若者たちの活動

広島で見た映画に、本当の原爆の恐ろしさを見たような気がする。それは文字よりもずっと強烈でなまなましかった。授業で見たVTRでは原爆の恐ろしさを後世にのこそうと活動している若者がいるということがわかった。」(前田一人)
 - 「
 1. “原爆のこと”が世界に広められていないコト
 2. 今までの授業はその単元が終われば終わりというカンジだったけど(私だけかな?) “広島について”の授業は重みがある(?)ってカンジがした
 3. 広島にも長崎にも原爆は落ちたのに全んど広島しかやらなかったコト」(中埜いず美)
 - 「・『原爆の子』のプリントを読むと当時の状態がどんなであったか写真よりよくわかる。結局体験のない人間には本当の恐ろしさはわからないのだろうかと考えた。
- 英語でやった詩も被爆者の悲しい叫びがこめられている。2~3篇よんだが感情(悲痛な叫び)

が並の詩よりはるかに強く表面に出ているし、逆に内に秘められた意味有りげな言葉も胸にずんときた。」(浦野督)

- 「・倫社の授業のプリント……あまり文がかざられていないので当時のことが生々しく頭の中で想像された。
- ・ノーコメントの人がいたということがとても印象深かった。それだけ——思い出すのもいやだということなのかと思った。
- ・Rの授業の英語の詩……英文で読むと実感がわからないが、日本語に訳したときに、あまりに強い言葉ばかりがつかわれているので、何もこんな単語つかわなくていいのにと考えた。」(中村妙子)
- 「・田中先生の話で自分も小さくて良く知らないが、それだからこそ気になるという心理
- ・原爆くがその人だけのものではなく、遺伝などにもかかわってくるということ
- ・“ヒロシマノート”で医者か自分だって被ばくしているのに他の人の手あてをしなくてはならなかったということ」(羽場気和子)

以上8名の感想を紹介したか、全体の数字にも示められているように、倫社とリーダーの授業に関して触れているものが多い。ヒロシマ学習にふり当てられた時間数の反映でもあるのだろうが、それでも「原爆が簡単につくれること」4名、「原発の恐怖」2名、「被爆者はレントゲン検査をあまり受けられないこと」1名などは明らかに、物理や数学の教師が論及したことの印象であると考えられる。しかし、このことは、原爆症の恐ろしさそのものや、原子力発電の安全性、水爆や中性子爆弾の開発といった現代の問題への発展性に欠けていたことを、今回の総合学習グループでのヒロシマ学習の試みの中に内在していた弱点として反省せねばならない、と述べている。

2. 広島印象

このもとの問いは、「広島で見たり聞いたりしたことの中で、“忘れられそうもないこと”」を3つまで求めたもので、映画、講演、写真、展示物などが、1ヵ月後の生徒の中にどのように定着しているかを明らかにしようとしたものである。1と同様に、文章で書いている生徒が多いので項目の設定が難しいが、次のような結果になった。

- 84名・映画「ヒロシマ 原爆の記録」
- 41名・資料館の展示物のすべて
- 37名・高橋館長の講演
- 21名・実際に見た原爆ドーム
- 20名 死の人影
- 19名・高橋館長の黒い爪のこと

13名・平和公園のおびただしい鳩のこと

10名・ケロイドの標本

8名・原爆で死んだ馬の剝製

・広島市の近代化

6名・市民の描いた原爆の絵

4名・原爆のすごさ

・資料館入口の人形

・平和公園自体の観光化

その他、資料館の展示物の中から具体的に上げているもの、「もり上がってしまった石壁」2名、「出口の感想ノート」2名、「弁当箱」2名、「被爆者の体から出てきたガラスの破片」3名、「グチャグチャになったガラスビン」3名、「グチャグチャの貨幣」1名なども散見され、2番目の“資料館の展示物のすべて”は、もう少し増えるはずである。また、“高橋館長の黒い爪”は、展示物の中にもあるし、講演の中でもふれられたことから分類に困るが、いちおう独立させてある。

映画「ヒロシマ 原爆の記録」については、次のような感想が多い。

「映画で見た、口のまわりの肉のない顔」(矢橋暁)

「画面に動きがあるせいか、写真よりも見ていて寒気がした。こわかった。」(中村妙子)

「映画の中で目の玉がなくなっていた人」(日比野道世)

「映画で見た原爆症の若者たち。“私たちはもうすぐ死にます。私たちをおぼえていて下さい。”ということば。」(松田亜紀)

「映画の中で見た死体のひどさ」(服部哲也)

「映画の中で、被爆した小さな子供が、おかあさん、おかあさんと呼びつけていたあの顔」(岩田佳子)

「広島で見た、映画が恐ろしくて、今でも頭の中からはなれない。あとはなし…。」(岩本右子)

「私は“ピカ”を見たといって目から血を流していた人を映画で見たこと」(水谷 香)

「映画の中でくちひるのとれた少年の顔」(太田邦夫)

「高橋先生の講演の前に見た映画。あれはほんとうにショックだった。わかっていたことでも、目の前ではっきり写されると、見ていられない。家はすべてくずれ、あちこちに黒こげの死体がおちている。もし自分かあそこにほうりこまれたら、どうなるだろう。」(関 昌之)

すでに二で触れたように、ヒロシマ学習の事前指導では、原爆の破壊力のすごさをしめすような視覚的教材(スライド、写真集など)の使用は意識的に避けてきた。詩や『原爆の子』などに依存して、言葉による想像力のひろかりに期待し、その上で、広島において初めて資料館の展示物や映画に接し、そのショックを

素直に受け入れ、記憶にとどめて行くことに期待した。その意味では、上の例のように、“忘れられそうにもないこと”としてほとんどの生徒が、映画「ヒロシマ原爆の記録」や資料館のさまざまな展示物をまず第一にあげていることは、当然とはいえ、所期の目的は達せられているのかも知れない。(前節1で指摘したように、この原爆に対する恐怖感を、現代における核兵器や中性子爆弾の保持・開発、原子力発電所の安全性への反問のバネにしきれていない、という反省は残る。)

講演についての感想は、次のような文章に代表される。

「高橋先生の言葉“とうとう無尽、二度とない人生だから”」(小阪裕司、崎山健二、佐藤真、小山恭子 他)

「講演での“何事も1から始まる”という言葉」(高須賀広久、高木由子、小笠原陽子 他)

「講演の人が“原爆の恐ろしさをたやさないために、あなたたちも後輩たちにおしえてあげてください”というようなことをいっていたこと」(伊奈里枝子)

「講演の先生が自分の手を見せてくれたこと」(曾根雅美、鈴木英明)

「お話の中で“宇宙戦艦ヤマト”という映画で、どうしてヤマトというものをつかわなければならないのか、とすごくおこったかんじでいわれていたこと」(松田亜紀、中村妙子、平野達雄 他)

「講師の先生のケロイドや形の異状な指」(加藤淳、野田研吾 他)

「高橋館長の言葉の中で“今の人は『俺一人で何ができるか』というが、一人がやらなければそれは永遠に0人のままであるんだ。”という言葉が今でも印象深い。」(松岡篤司)

「高橋さんが原子力発電について猛反対されていること」(松野和彰)

「館長さんの講演の中の“今の平和は本当の平和ではない”と言われたことば」(石黒三保子)

「講師の人が言った“日本がしかけた戦争で爆弾がおとされた”ということば」(竹村理加)

「戦争が美化されて、それが若者の間でうけているということ」(坪井俊治)

「日本は武装によってではなく、非武装において世界の人々の理性、思想などによって平和を得るべきだ、という言葉」(山川博幹)

高橋館長のお話の概略はすでに三で述べたが、生徒たちにとっての“忘れられそうもないこと”として印象に残っていることは以上の通りである。「とうとう無尽、二度とない人生だから」という言葉と「何事も一から始まる」という言葉を、高橋館長はさりげなく

使われたが、この2つの平凡な言葉がとりわけ多くの生徒たちの胸のうちに刻み込まれた理由を考えて見ると、やはりその前段として語られた14才での被爆という逆境から、逃げ出すのではなく、その逆境の意味をとことん考え抜き、ヒロシマ体験の〈語り部〉として自己規定をして生きておられる館長の真摯な生き方への共鳴である、と思う。

その他、広島印象について、次の2つの文章を紹介しておきたい。

「“平和、平和”といわれる中でぶくぶくふとってあまりとべなくなったはと。」(佐橋明美)

「やはり朝鮮の被爆者の慰霊碑が公園の外にあったこと」(秋本祐子)

前者と同様に“鳩”に思いをはせたものは、他に12名もいる。「あそこの公園にいた平和の鳥であるぶくぶくに太ったはと!!」(中埜いづ美)と言うように、いずれも、鳩に向けられた“冷ややかな目”は、もちろん、ヒロシマの惨状を見た直後の“非日常性”のなさしめるワザなのかも知れないが、ヒロシマが平和公園それ自体の中ですら風化されつつあることの直観につながっているような気がする。それは、「今のヒロシマには資料館や、ドームのほかには何も原爆の跡がないこと」(柴田義幸)、「①平和公園の平和な様子と資料館のぞっとする光景(大へんおこれてきた)、②映画のヒロシマと現在の広島の違い、ヒロシマの人々は生きるよろこびがあったのに対し、広島の人々はその日、その日がすぎればいいと言う、いいかげんな気持で生きている様に思った」(山田耕三)というような印象とも同質だと思う。

朝鮮人被爆者の慰霊碑(正式には、韓国人原爆犠牲者慰霊碑)が平和公園に通ずる本川橋のたもとにあることについては、事前学習で触れておいたが、2の問いでこの慰霊碑のことが“忘れられそうにもないこと”としたのは3名。1の問いに対しても、慰霊碑のことをあげているものが別に3名いるから、計6名の生徒が、バスからみたこの慰霊碑のことを再認識したことになる。

ヒロシマを通して、日本人の戦争責任の問題、アジア人への加害者性の問題にせまろうとしたことは、今までの生徒の感想の中にもある程度、反映していると思う。辛泳洙の“被爆と民族の問題”、『白いチョゴリの被爆者』などを事前学習でとりあげた理由は、“唯一の被爆民族”という、韓国人被爆者への加害者性の問題をスッポリ抜き落とした自己規定から脱することにあつた。このようなヒロシマ体験の再検討なしには、反核という人類的視点での連帯意識は生まれえないし、世界平和への希求もほんものにはなるまい。

五、ヒロシマ学習の発展のために

倫社を担当する度に毎年、行なってきたヒロシマ学習、そして生徒たちが広島を訪れるようになってから3回目のヒロシマ学習という、一被爆教師としての私の実践を、今年度の実践を中心にすえながら、中間的にまとめてみた。こうしてまとめてみると、まだまだ、ヒロシマを伝え、ヒロシマから考えるための教材設定や授業の視点、方法に粗さや無理が目立つ。とくに、今年度は、総合学習グループの仲間たちの協力を得て取り組むことができ、従来、弱かった原爆の構造や原子力発電の問題など、文字どおり、ある程度、総合的なヒロシマ学習が展開できたように思う。しかし、既に指摘した問題点も含めて、今年度のヒロシマ学習に内在していた問題点を次の3つの側面からまとめてみたい。

1. 研究旅行全体とのかかわり

ここ数年(1975年より)、必ず広島に行くようになったとは言え、日程的には広島が旅行のメインではない。3泊4日の中心は萩や津和野でのグループ研究にあてられており、広島・平和公園には2~3時間寄るだけのことである。『教育評論』1979年8月号所収の新垣健“修学旅行<広島>の実践”は、中学生の修学旅行でのヒロシマ学習への精力的な取り組みを報告しているが、本校では、今年度こそ、高橋館長の講演と映画「ヒロシマ 原爆の記録」を全員で見ることが実現したが、昨年度までは、原爆資料館を見学していただけたこと、私のヒロシマ学習の力点も、旅行前の事前学習にあった。萩や津和野は生徒たちの自主的な研究活動であり、広島は教師主導型の単なる見学地という切断は、昨年度も、今年度もあったように思う。従って、萩や津和野における明治維新の中心人物、あるいは維新後の明治的人物の研究(もちろん地理的な研究もあるのだが…)とヒロシマとの関係は何も問われずに来たし、問うこともなかった。このような状況について、“はじめに”とIの徳井論文がすでに問題点と望ましいあり方を提起しているが、研究旅行全体で、生徒たちに一体何をつかませようとしているのか、ある程度、はっきりさせておかない限り、“研究”旅行とは名ばかりになる危険性がある。“総合学習の場としての研究旅行”も、各教科の教師がそれぞれの専門性の立場から旅行のしおり・資料づくりに協力するというだけでは、“総合学習”とはほど遠いことである。教科の専門性を生かしながら、問題を構造的、多層的に理解することを可能にして行く指導が必要なのであり、そのための協力でなくてはならない。ヒロシマが日本近代史の帰結であり、現代史の問題性を映し出す一つの重要な鏡となり得るのだとしたら、そのような立場をより豊かにする教師の側の“総合学習”がまず必

要なのだと思う。

2. ヒロシマ学習への取り組み方

倫社におけるヒロシマ学習の問題点は次に触れることにして、総合学習としてのヒロシマ学習にもいくつかの問題点があった。

『ひと』1979年9月号“若ものの眼・被爆体験を学んで”は、兵庫の物理教師石原武司のヒロシマ学習への取り組みを知らせてくれた。私自身、物理の教師がよくここまでやれたなあ、という思い(それは『学習指導要領』に緊縛された意識の表われ以上の何ものでもない)にとらわれた。倫社の場合、体験→経験→思想という問題は避けて通ることの出来ない問題であるし、ヒロシマが現代人のおかれた状況や現代思想(たとえばバートランド・ラッセルやサルトルなど)にそのままつながる必然性があるのだが、物理や数学、国語、英語ではどうだろうか。恐らく『学習指導要領』そして、それに準拠した教科書にとらわれている限りは、何も出来ないと思う。自主教材を用いる努力が必要ではないか、と思う。今回、英語での“The Songs of Hiroshima”を用いての山田の実践が多くの感銘を生徒に残したように。

この自主教材を作ること自体もそうだが、必要なことは、グループでのもっと組織的な取り組みであったと思う。お互いの守備範囲を明確にすること。強調して良いことは全員が重複して強調しても良いであろうし、専門性を生かして他にまかせた方が効果的なものは大胆に割愛することが、今後、どのようなテーマで“総合学習”を試みる時にも必要な方法だと思う。全員で強調することと、分担することとを分つためにも組織的な取り組みが絶対に必要であった。

3. 倫社の年間計画の中での位置

私は森有正の体験→経験→思想の話をする時、2つのことをねらっている。“思想が生まれる”ということと“思想を学ぶ”ということである。結局は同じことなのかも知れないが、“思想が生まれる”とは、倫社に登場する様々な思想家たちの思想は生きた人間によって、様々な体験のあとで獲得されたものなのだ、という立場を忘れずに勉強して行こうということであり、“思想を学ぶ”ということは、学ぶ者の体験がその思想と触れ合い、学ぶ者の体験から学ぶ者の思想へと受肉化(Incarnation)されねばならない、という2つのことを同時に語っているつもりである。従って私の被爆体験と、生徒たちのヒロシマ体験とから倫社の授業を開始するためには、研究旅行は1学期の方が好都合であった。昨年度から研究旅行は2年2学期の行事となり、ヒロシマ学習は旅行に出かける1カ月前に行なうようになった。今年度の場合、1学期における倫社のオリエンテーションとしての森有正論、私

の被爆体験の話と2学期におけるヒロシマ学習とがあまり効果的に結びつかなかったように思う。

さらに、研究旅行後、すぐに源流思想に入ってしまったために、一人の生徒が「ようやくヒロシマから解放されてホッとした」と授業ノートに記したぐらいで、ヒロシマ学習のまとめが充分でなかった。今となつては、社会科教室使用の関係で見せることの出来なかった2つのクラスにも、VTR「若い広場'79ヒロシマ体験」をせめて見せて、まとめをやるべきであったと思つている。

研究旅行が2学期の行事としてあるのなら、研究旅行後は、ヒューマンイズムの思想から入って、現代思想を位置づけて行く方法を検討しておく必要があるように思う。

六、最後 に

今年度研究旅行から戻って1カ月たって実施したアンケートの3と4(四を参照)については何もふれずに来てしまった。最後に、それぞれ対照的な2つの感想を掲げて、今後の私のヒロシマ学習に向けての試みの反省材料としたい。

「“被爆体験”の風化が嘆かれています。あなたはそれをどう思うか?そしてもし、若者の立場から“風化”させてはいけないものだと考えるとしたら、あなたは一体、何をしようと思うか?」

○「万物は移り変わる。風化するのは仕方ない。時代に逆らつて、風化をとどめる必要がどこまであるだろうか。戦争はこわい。人が死ぬ。だからやってはいけない。それだけでいいんじゃないだろうか。」(山口達也)

○「被爆体験は風化させてはいけない。僕なら僕にも簡単にできることからやっていきたい。たとえばいろいろな人に“広島には一生のうちに一度は行ってみるといい”とすすめるとか、若い人々(僕らより)に僕らがヒロシマでうけたショックを語ってやるとか。少しでも多くの人々に僕らが受けたショックを同じように受けさせたい。被爆体験が風化してしまひ、原爆ドームなどがただの見せ物になってしまつたら、もう人々は理屈でしか戦争のおそろしさを理解できないだろう。」(小阪裕司)

「あなたにとって、今、ヒロシマとは、どのような意味を持って来ていますか?」

○「倫社で学ぶ前後でそれほど認識が変わつたとは思えないがヒロシマ自体は単なる一地方都市の名にしすぎない。日本人の心の中の崩れゆく戦後の最後のかげらとでもいおうか。ヒロシマによって自分の人生が変わる、そんなことはなかったが、これもやはり一つの風化なんだと思う。もうヒロシマどころか戦争自体はくらの人生に何の意味ももたない。」(加藤淳)

○「昔(以前)は、ただ恐い所というか、恐いことのある所という感じがほとんどだったけれど、今は、ヒロシマをのりこえて生きている人々のことや、第2の石油とかいわれている原子力のことや、いろいろと考えて、古かつた考えが、今、現在のこととヒロシマとをむすびつけて考えられるようになった。でもヒロシマは、広がり、その言葉の中に見出しはしたけれど、元は、やっぱり原爆の恐しさだと思う。現在と、近い未来のことが考えられるだけの広がりはでてきたけれど。」(伊藤真美)